



『バカボンのパパと読む老子』を読むのだ！

ごくまれに、「校長先生の座右ざゆうの書は何ですか？」的なことを聞かれることがあります。「座右の書」とは、常に身近に置いて人生の指針とする本のこと。いわば「座右の銘」の本バージョンですね。そんなとき筆者は、「そうですね、まあ、『老子らうし』とかですかね？フツ」などと答えることにしています。なぜ『老子』なのか？理由は簡単で、そう答えるといかにもインテリっぽくて、カッコいいからです。別に『論語』(注1)でもいいのですが、『老子』の方がひねりが効いていて、より相手に「おお！」と思わせる期待値が高まるような気がします。(サイコパス?!)

それでは、それは根も葉もないウソかといえ、まんざらそうでもありません。筆者が折にふれて『老子』をひも解いているのは事実です。まあ、その『老子』というのが、『バカボンのパパと読む「老子」』ドリアン助川著(角川文庫)なんだけど。この本と書店で偶然対面したのは十数年前。それ以降、自宅の本棚の隅にあって、気が向いたとき、何かのヒントやきっかけが欲しいときなどに、パラパラとページをめくっています。

本題に入る前に、Z世代の生徒諸君には予備知識が必要かもしれません。「バカボンのパパ」とは、鬼才、赤塚不二夫先生によって描かれた『天才バカボン』に登場するキャラクターです。『天才バカボン』は、それまでのギャグ漫画の常識を軽く限界突破し、1970年代、テレビアニメ化され、社会現象を起こしたギャグ漫画の金字塔といえます。当時、小学生男子たちは皆、「タリラリラ〜」と道を歩き、友だちに会えば「コニヤニヤチワ」とあいさつし、驚いたときは「レレレのレー！」と叫び、学級会では「賛成の反対なのだ」と発言して「これでいいのだ！」と開き直っていました。(ホントかよ?)もともと「バカボン」という少年が主人公だったのですが、その奇想天外な行動、シュールでナンセンスな笑いで大人気となったのが「バカボンのパパ」です。ちなみに現在、芦田愛菜さん、出川哲朗さん、小池栄子さんが出演している携帯電話会社のテレビCMは、『天才バカボン』が元ネタです。

『バカボンのパパと読む「老子」』の著者、ドリアン助川さんは、早稲田大学で東洋哲学を学び、放送作家などを経て、1994年にバンド「叫ぶ詩人の会」でデビュー、著書多数、現在は明治学院大学国際学部教授という異色の経歴の持ち主です。学生時代、老子の肖像画がバカボンのパパに似ていることに衝撃を受け、さらに老子けう そうだいの希有けう壮大な思想、常軌を逸した想像力がバカボンパパの言動ごうぶつを彷彿させることに気づいたドリアンさんは、『老子』の「パパ語訳」を思いついたそうです。

生徒諸君も倫理や漢文の授業で勉強すると思いますが、『老子』はおおよそ二千四百年ほど前に書かれた、中国春秋時代の古典です。『老子』を書いたのは「老子」という人物とされていますが、彼がどのような人物かは諸説あってはっきりしません。もしかしたら、「老子」という特定の人

物は存在せず、複数の人物によって何代にもわたって書き継がれてきたのかもしれませんが。それでは『老子』には何が書かれているのか？『バカボンのパパと読む「老子」』の続編として書かれた『バカをつらぬくのだ！～バカボンのパパと読む老子・実践編～』ドリアン助川著（角川 SSC 新書）の中でドリアンさんは、くものすごくシンプルにまとめると、『老子』全八十一章は「道＝TAO」にまつわる洞察の連続である。TAOとは、この宇宙をならしめている力、存在のすべてを司る仕組み、存在そのもののことで、自然とその摂理、それを支えている全エネルギーでもある。私たちもまた自然現象の一部である以上、TAOに逆らうことはできないし、TAOの力が及ばないところで生きていくこともできない。TAOを理解し、TAOと呼吸を合わせる生き方を「無為自然」といい、「無為自然」こそがもっとも理にかなった姿勢なのだ」と説明しています。

というわけで、今回の校長室だよりは、ドリアンさんの『バカボンのパパと読む「老子」』に思いっきり乗っかって（ほぼまるパクリ）、①『老子』原文（書き下し文）、②一般的な訳、③ドリアンさんの「バカボンのパパ語訳」、④筆者（校長）の感想・たわごと・うわごと、という四段階形式で、『老子』について考えてみたいと思います。それではヒアウイゴー。

【『老子』第一章】

①原文 道の道う可きは、常の道に非ず。名の名づく可きは、常の名に非ず。名無きは、天地の始めにして、名有るは、万物の母なり。故に常に欲無きもの、以て其の妙を觀、常に欲有るもの、以て其の徼を觀る。此の兩つの者は、同じきより出でたるも而も名を異にす。同じきものは之を玄と謂う。玄の又玄、衆妙の門なり。

②一般 道(TAO)が語りうるなら、それは恒常の道ではない。名が名付けうるものなら、それは恒常の名ではない。名のないところから天地が現れたのであり、名があつて万物は存在し得た。だから、ものに対する欲望の無い者のみが、道の妙(見えない本質)を觀ることができ、常に欲望にとらわれている者は、その徼(結果として現れた姿)しか觀ることができない。妙と徼の二つは同じところから出てくるが、それぞれ名を異にする。これらが出てくる同じところを玄(奥深い神秘)と呼ぶ。いや、玄よりもいっそう見えにくい玄、すべての妙が出てくる門である。

③パパ語 言葉でどうだとわかるようなものは、永遠不滅のTAOではないのだ。レレレのレなのだ。目ん玉つながりのおまわりさんとか、ウナギヌとか、ニャロメとか、名前を付けて呼べるようなものも、永遠の存在ではないのだ。

名付けようがないものからお空や地面は始まったのだ。そしてあらゆるものが生まれ、名前が付いて存在となったのだ。だから、あれが欲しいこれが欲しいと思わない無欲の人のみが、現象の向こう側にある「見えない本質」を觀ることができるのだ。あれが欲しいこれが欲しいと欲のかたまりになっているような人は、結果として表れたものの姿しか觀ることができないのだ。

現象に隠された本質も、現象そのものも、同じところからレレレのレーと出てくるが、見えないほうは妙と言ひ、見えている現象のほうを徼と言ふ。この二つが出てくる同じところを玄と呼ぶのだ。いやいや、玄を生み出すもっと見えにくい玄、あらゆる本質が飛び出してくる門がこの世の根っこにあるのだ。これでいいのだ。

④校長 昔、「そうだ！老子、読もう！」と思い立ち、岩波文庫か何かの『老子』を読み始めたも

のの、この第一章であえなく撃沈した覚えがあります。だって、この上の①や②の文章を読んで、「ふんふん、なるほどね、はいはい」となりましたか？老子のオジさん、イジワルしないでもうちょっと分かりやすく説明してよ、という気持ちになった人がほとんどだと思います。ところがどうでしょう。③のバカボンのパパ語訳で読むと、「そうか、そういうことだったのか」と老子の言葉がすると頭に入ってくるではありませんか。

天地万物は、語ることも、名付けることもできない何かから始まった。そしてそこから生まれてきたものたちに名前が付けられて、はじめて人々はそれらの存在を知ることとなる。(ドリアンさんも書いているけど、このへんの理屈は、ソシュールの記号論に似ています。例えば、緑色を表す言葉をもたない民族にとって緑色は存在せず、青や黒として認識される。) 見ること、語ることのできない本質も、その結果として生じる現象も、もとは同じく、「玄＝奥深い神秘」から生まれたものであり、玄こそがあらゆる本質を生み出す根本なのだ、というのです。(見えない本質と、それが形をとった現象とは、実は表裏の関係にあり、二つは同一である、という考え方は、仏教の色しき即是空、空そく即是色せきにも似ているなあ。)

いずれにしてもこの第一章からは、『老子』の思想を理解するうえで、その根本にある道(TAO)を避けることはできないことがわかります。サッカーワールドカップ、オランダ戦での本田圭佑さんの解説風にいえば、一にTAO、二にTAO、三にTAO、ということです。それでは、バカボンパパのわかりやすい解説に感謝して次に進みましょう。

【第九章】

①原文 持じして之これを盈みたすは、其その已やめに如しかず。揣しして之を鋭くするは、長く保つべからず。金きんぎよく玉どう、堂どうに満みつれば、之を能く守る莫なく、富ふう貴きにして驕おごれば、自みづから其の咎とがを残とす。功こう遂とげて身しりぞ退とくは、天の道なり。

②一般 あふれそうになっている器をこぼさないように両手で支えるのはやめたほうがいい。剣の刃に焼きを入れて鋭くしても、長くもつものではない。宝物がお堂に満ちあふれていても、それらを守り続けることはできない。富んだ上に傲慢ごうまんになれば、自ら破滅に向かうようなものである。成功したら身を退ける。これが天の道である。

③パパ語 あふれそうになるまで水の入ったバケツを、こぼさないようにずっと持っていようとしたら手が痛くなるのだ。そんなことはやめといたほうがいいのだ。フォークとかナイフとかの先っちょを刺さるぐらいに鋭くしても、何度もご飯を食べているうちに丸まってくるのだ。部屋を宝物でいっぱいにして喜んでいても、それを盗とられないようにするのは難しいのだ。お金持ちになって、えらそうに町を歩いたりすると、自分から嫌われにいくようなものなのだ。破滅するのだ。そういうわけだから仕事で成功したら、さっさとその場を去るのだ。それが天の道理なのだ。TAOなのだ。これでいいのだ。

④校長 シルベスタ・スタロンの『ロッキー』という映画があります。フィラデルフィアの下町でボクサーとしての成功を夢みる若者ロッキーが、ひよんなことからヘビー級チャンピオンへの挑戦権を獲得し、「えっ、ロッキー？いやいや、ぜーったいあかんで(関西弁)」という大方の予想をくつがえし、ついにはチャンピオンになるお話です。『ロッキー』は大人気となりシリーズ化されるの

ですが、さすがのロッキーも3作目「ロッキー3」にもなるとちょっとダラダラしてきます。何度もチャンピオンを防衛し、莫大なファイトマネーと豪邸、高級車を手にし、キレイな奥さん、かわいい子供たちに囲まれたロッキーは、贅沢に慣れ、闘争心を失ってしまいます。高校生だった筆者は映画館で、「おい、ロッキー！ そんなことじゃ次の試合でやられちゃうぞ！ 早く目をさませ！」と必死で説得していたのですが、ロッキーは聞く耳を持ちません。結局、モヒカンヘアの挑戦者にボッコボコにされて、王座を陥落するのはです。(だから言ったのに…)『老子』第九章を読んでいて、ふとそんなことを思い出しました。

人間は、成功や名誉を手にする、いつまでもそれを手放すまいとするものです。過去の栄光に固執すること自体あまりカッコいいものではありませんが、さらにそれをいばって見せびらかしたりすれば、まわりからドン引きされて孤立するのは当然です。老子おじさんは、そんなことにならないように、成功したらその場にとどまらず、潔く身を引くのがよいと述べています。

世界を見渡すと、リーダーと呼ばれる立場の人たちの中には、水があふれそうなバケツを全力で支えている人がたくさんいるように思えます。国家の指導者たちは、一度手に入れた権力を誰にも渡すまいと必死です。企業の経営者たちにとっては、既得権益を守り、より大きな利潤を追求することが最優先事項です。成功者はセレブな生活をSNSなどで誇示し、さらに自己満足を深めていきます。こうした人間の習性は、現代だけでなく、はるか昔、老子の時代から繰り返されてきた、ある意味、人間のあたりまえの姿なのかもしれません。しかし、それに対して、老子のおじさんは「それって疲れませんか？」と言っているような気がします。私たちが、「あたりまえ」として疑わない価値観とは違った選択肢があることを、『老子』は教えてくれています。

あ、誰ですか？「まわりにドン引かれてもかまわないから、一度でいいから、大金持ちになってみたい」とか言っている人は？

【第十一章】

①原文 三十の輻、一轂を共にす。其の無に当たりて、車の用有り。埴を埴めて以て器を為る。其の無に当たりて、器の用有り。戸牖を穿ちて以て室を為る。其の無に当たりて、室の用有り。故に有の以て利と為すは、無の以て用を為せばなり。

②一般 三十本の輻が轂(車輪の中心)に集まる。その無の空間があつて車輪の働きがある。粘土をこねて器を作る。その無の空間に器の働きがある。戸や窓の穴をあけて、部屋を造る。その無の空間に部屋の働きがある。つまり、形有るものが利益をもたらすのは、何もないことの働きのせいなのだ。

③パパ語 自転車のタイヤは三十本のスポークがタイヤの軸に集まって、それで丸くなっているのだ。スポークで支えている何もない空間があるからこそ、タイヤはタイヤの働きをするのだ。バカボンが粘土をこねてどんぶりを作るときもいっしょなのだ。何もない空間があるからこそ、どんぶりはどんぶりの働きをするのだ。戸や窓の穴をあけて部屋を作るときも同じなのだ。何もない空間があるからこそ、部屋は部屋の働きをするのだ。

タイヤとかどんぶりとか部屋とか、そういう形あるものがあるから、バカボンとかハジメちゃんとかママは暮らしていけるのだ。そのタイヤとかどんぶりとか部屋とかの形有るものは、何もない空間があるから使えるのだ。これでいいのだ。

④校長 第十一章は「これ、漢文の教科書でやったよね？」と思った人も多いかもかもしれません。バカボンパパが言うように、輻とは自転車の車輪でいうスポークで、車輪の中心にある車軸とタイヤ部分をつなぎます。その車軸が轂で、ここを支点にして車輪は回ります。スポークは細い棒のような形状をしていて、その周囲には何もない空間があります。何もない空間があるから車輪はくるくる軽やかに回ることができるのです。(タイヤが、空間のない円盤みたいな形だったら、重くて回るのが大変ですよ。)同じように、器は、何もない空間があってはじめて器の機能を果たすし、部屋に入口や窓がなくて壁一面だったら、出入りすることもできません。

筆者は国語の教員として三十数年間、教壇に立ってきました。その中で、生徒から「古文とか漢文って、どうして勉強しなきゃいけないんですか？」という質問を受けることが何度かありました。若いころは「はっ？何でって、文科省の指導要領がそうなってるから。それと大学入試で必要になるから。とにかく、つべこべ言わずに勉強しろ、ペーロー！」と言い…はしませんでした、心の中で思っていました。(サイアク!)しかし、教員としての経験を重ねるうち、ちがう見方が生まれてきました。

古文や漢文に限らず、学校で学ぶことの中には、「これを勉強して、将来、実際に何かの役に立つのかな？」と疑問に思うものが少なくないかもしれません。しかし、私たち人間は道具や機械と違って、「〇〇のため」という明確な目的があって存在しているのではありません。例えば、君が大学入試に合格するためだけに存在しているなら、朝起きてから夜寝るまで勉強し続ければいいし、お金儲けのために存在しているなら、四六時中どうすればお金が儲かるか考えて、わき目もふらずお金儲けに精を出せばいいわけですが、現実はそのではありませんよね。私たちが日々を人間らしく、ポジティブに過ごしているのは、一見無用に見えるたくさんのもに支えられているからです。古文や漢文で触れる古人のことばも、数学の複雑な証明も、レギュラーに選ばれず応援専門の部活動も、自分だけのこだわりの推し活も、どこか見えないところで君を支える「無用の用」となっているのではないのでしょうか。

さらにいうなら、『老子』そのものが「無用」ともいえます。ややこしくてわかりづらい老子おじさんの言葉に耳を傾けても、お金がたまるわけでもないし、お腹がいっぱいになるわけでもありません。しかし、心が疲れてしまったとき、ネガティブな思いにどっぷりと浸かってしまったとき、老子おじさんのことばが助けとなったことは、筆者自身も何度か経験しています。そして、同じように感じた人たちがたくさんいたからこそ、『老子』は悠久の時をこえて読み継がれる古典となりえたのです。形あるものが利益をもたらすのは、何もないことに支えられているからなのです。

【第二十四章】

①原文 企^{つまた}つ者は立たず。跨^{また}ぐ者は行かず。自ら^{あら}見^みわす者は明らかならず、自ら^{あら}是とする者は彰^あわれず。自ら^{あら}伐^ほむる者は功^{こう}無く、自ら^{あら}矜^{ひさ}る者は長^{なが}しからず。其^よれ道^{じゆく}に在^{ざい}るや、余^あ食^じ贅^{ぜい}行^{こう}という。物^{もの}或^{ある}いは之^{これ}を悪^{にく}む。故^ゆに道^{みち}有^ある者は処^おらず。

②一般 爪先立ちの者は立っておられず、大腿で急ぎ足の者は遠くまで行けない。自分を見せびらかす者はものが見えず、自分が正しいと思いついでいる者は世を明らかにできない。自身を誉める者は成功せず、自らを誇る者は長くその立場にはいられない。

これらはTAOにおいては、余った食べ物や、余分な行いと言われる。おそらく万物はそれを嫌

う。だからTAOを有する人はそこにはいない。

③**パパ語** 爪先で立とうとする人はずっと立ってられないのだ。バカ歩きの大股で急ぐ人は遠くまでは歩いていけないのだ。自分が見ている世界がすべてだと思っている人はものごとの本質が見えないのだ。自分が正しいと思い込んでいる人はこの世の道理が見えないのだ。自分がやったことを、どうだまいったかと自慢するような人は何も成し遂げられないのだ。自分の立場を、どうだかっこいいだろうと誇るような人はその立場にはずっといられないのだ。

そういう振る舞いはみんなTAOの境地からすると、食べ切れない食べ物や、すごく無駄な動きだと言われるのだ。さまあみろなのだ。TAOによって生かされているあらゆるものはこうしたことを嫌うのだ。だから、TAOを身に付けた人はこういうことはしないのだ。これでいいのだ。

④**校長** ものすごく私的な話題で恐縮なのですが、今年の3月、ジョギングしていて転倒しました。千波湖の周りのな一んにもない平らな道で。右足を前に出そうとしたら爪先が地面に引っかかって、右肩を支点に派手に一回転しました。すぐわきでワンちゃんを散歩させていたおばさんに「あらー、あなた大丈夫？」とか心配され、「だ、大丈夫です、大丈夫です、何でもありません、はい」と、明らかに大丈夫じゃない人間の反応を示しながら、恥ずかしさのあまり、その場を素早く逃げ去りました。さいわい擦り傷程度で済みましたが、時々ブランクはありながら数十年ジョギングをしてきて、こんな転び方をしたのは初めてで、いささかショックでした。老子のおじさんに「企つまたつ者は立たず。跨またぐ者は行かず。無理をしな^といで、そろそろ年齢を考えなさい！」と言われたのかもしれない。

第二十四章が述べているのは、簡単にいうと「自分をよく見せようとして無理をしたり、自分だけが正しいと言い張ったり、自分をひけらかしたりすることは、長続きせず、自分をおとしめることにつながるから止めておきなさい」ということです。ちなみにこの章で、バカボンのパパは「爪先で立って大股で歩きながらラーメンの大盛りを食べるのは本当に苦しいのだ！」という名言を残しています。

私たち人間は多かれ少なかれ、誰もが虚栄心ごうまんや傲慢さを持っています。超かっこいい高級スポーツカーを無理して60回ローンで買って、ローンの支払いができなくて手放してしまったり、グループ探究のテーマを決める話し合いで、他人の意見を否定しまくって自分の考えを押し通し、結果、グループ内で孤立してしまったり……。虚栄心や傲慢さのどこがいけないのか？老子のおじさんは、それらがTAOに反するからだ、と言っています。TAOという宇宙の摂理の中に人は存在しており、TAOは私たちの生命の本質そのものである。人間にとってTAOのリズムの中で生きることが幸福であり、さまざまな不幸や災禍は、人がTAOから外れることはずによって生じるのだ、というわけです。

やはりラーメンは、お店でゆっくり椅子にすわって食べるのがおいしいですね。トッピングに煮卵を追加して、ギョーザセットが付いたらなお最高！

さて、ここまでドリアンさんとバカボンのパパの力を借りながら『老子』について考えてきました。老子おじさんのわかりにくい話が、少しは身近に感じられるようになったでしょうか？

『老子』の理解に欠かせないTAO(道)について、『バカをつらぬくのだ！……』の中で、ドリアン

さんが興味深いエピソードを書いているので紹介します。ドリアンさんは仕事場のアトリエで朝顔を育てており、毎年5月ごろに種を蒔くのだそうです。毎日じょうろで水をやると、やがて双葉が顔を出し、本葉が繁り、あつという間に蔓が伸び始めます。そして、夏になってたくさんのつぼみが出て、突然、毎朝いっぱいの花が咲き出したときの喜び。夏の間ずっと朝顔たちはドリアンさんの目を楽しませてくれます。けれども、秋風が吹き始めると、日を追って蔓はしなび、花も咲かなくなり、やがて朝顔は葉を散らせて枯れていきます。ドリアンさんは言います。「しかしこれは仕方がないことです。朝顔の努力が足りなかったからではなく、すべてはこの大自然の力によって与えられたサイクルです」

ところが朝顔の中には、知らないうちに種を落としていて、十一月くらいに芽を出してくるものがあるそうです。冷たい風の中、縮れた双葉を伸ばそうとする朝顔を不憫に思ったドリアンさんは暖房の効いたアトリエの中に入れてあげます。しかし、朝顔は、冬につぼみをつけることは決してありません。年を越すことなく枯れてしまうのです。「でも、これが宇宙の力です、自然の力です。伸ばしもするが、奪いもする」「発生から消滅まで、あるいはそれ以前からそれ以降まで、私たち命あるものは、とほうもなく大きな力に支配されています。生み出す力、営みを支える力、滅ぼす力。この大自然の力、目に見えない力、そのシステムと、それを支配している全エネルギーをTAOと言います」とドリアンさんは書いています。

ここには、諦めや妥協とは違う究極のポジティブシンキング(注2)があるように思います。どんなに科学が発展しようが、AIがオリアオリアオリアと社会を変革しようが、人間は人間でしかない。人間であることからスタートする以外に道はないのだ、というメッセージだと筆者は受け止めました。

世の中には『老子』を批判する立場の意見もたくさんあります。その一つが、人為的な努力を否定する「無為自然」は、虚無主義や現実逃避につながり、結果、社会や文明の発展を阻害したり、社会悪を容認することになる、というもの。また、現状をありのまま受け入れることを推奨する『老子』の思想は、困難を克服したり、不条理を変革することを否定し、宿命論を助長するという指摘もあります。今回、校長室だよりを書くにあたって、中学生や高校生に『老子』を読むことを勧めることに問題はないかな？という思いも正直ありました。

しかし、『老子』が、欧米的な世界観に根ざす近代合理主義とは異なる「もう一つの真実」を内に秘めた思想であることは、否定できないと思います。一から十まで、老子のおじさんの言うとおりに生きていったら、もしかしたら社会不適合者のレッテルを貼られてしまうかもしれません。が、時に応じ、場合によって、もう一つの視野を持って生きることは、その人の心のフィールドを広げ、多種多様な課題に柔軟に対処する力をもたらすのではないのでしょうか。

さて、上記の問題にどう解答するかは生徒諸君一人一人におまかせして、今回の校長室だよりはここで筆を置きたいと思います。長い文章を最後まで読んでくれて、ありがとう。今回のテーマはバカボンのパパ、…じゃなくて『老子』でした。これでいいのだ！

注1) 論語

中国春秋時代の思想家、孔子の残したことばや行いを記録した書物。儒家の教えの原点をなしており、仁(思いやりの心)、礼(仁にもとづく行動様式)を重視した思想を説いています。ちなみに儒家が社会道徳や規律を重んじる点について、『老子』は、「大道廢れて仁義あり(人が守るべ

き本当の道＝TAOが失われたため、仁や義のような道徳やルールが説かれるようになったのだ)」と、かなり手厳しく批判しています。

注2) ポジティブシンキング

ものごとの良い面を見て、前向きにとらえようとする考え方

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。